

論文審査の要旨	
筆頭著者（学位申請者）氏名	渡邊 洋章
主論文の題目 および 掲載・審査委員	題 目 在日外国人学生が抱えるこころの健康に関する医療アクセスへの 阻害因子に関する調査研究
	掲載誌 聖マリアンナ医科大学雑誌 2025； 52： 99-110
	主査 高田 礼子 副査 藤谷 博人 副査 小口 芳世
[論文の要旨・価値] 近年、大学生のメンタルヘルス不調の増加が問題視されている。特に、留学生は、受入国の学生と同等以上にメンタルヘルス不調を抱える割合が多い一方、精神科受診の割合は少なく、受診時に重篤化している例も少なくない。そのため、患者がケアの必要性を認識した時に適切な医療サービスを求め獲得するための機会である「医療アクセス」の改善が求められているが、未受診者を含む留学生集団を対象とした阻害因子の検討は十分でない。本研究では、在日外国人留学生におけるメンタルヘルスの現状と医療アクセスの阻害因子を日本人学生との比較により明らかにすることを目的とした。 上智大学に在籍する日本人学生および留学生を対象に、オンラインでのアンケート調査による横断研究を実施した。解析対象は 133 名（日本人 83 名、留学生 50 名）であった。年齢、性別、国籍、日本語能力、収入、健康保険加入状況などの背景に加え、メンタルヘルス尺度として Patient Health Questionnaire-8 (PHQ-8), Generalized Anxiety Disorder scale (GAD-7), Alcohol Use Disorders Identification Test-Concise (AUDIT-C), Brief Resilience Scale (BRS)について、日本人と留学生を比較し、各メンタルヘルス尺度に影響する因子を重回帰分析により評価した。また、メンタルヘルスの問題に関する援助要請行動を調査し、メンタルヘルスの問題を抱えたが、心理職や医師へ助けを求めなかった状態を「医療アクセス障害」と定義し、そのリスク因子を多変量ロジスティック回帰分析により検討した。本研究は、本学生命倫理委員会の承認(第 6478(B61)号)を得て実施された。 調査の結果、留学生の 68%が日本語会話能力に不自由を感じていた。重回帰分析の結果、共変量調整後も留学生であることは日本人と比較して、うつ傾向 (PHQ-8 スコア、 $p=0.005$) と不安傾向 (GAD-7 スコア、 $p<0.001$) の有意な悪化因子であった。一方、医療アクセス障害をアウトカムとした多変量ロジスティック回帰分析の結果、留学生という属性自体は有意なリスク因子ではなかったが、「日本語会話能力の低さ ($p=0.037$)」および「レジリエンス (回復力) の高さ ($p=0.047$)」が有意なリスク因子として抽出された。 本研究は、在日外国人留学生のメンタルヘルスに関する医療アクセス阻害因子を日本人学生との比較から定量的に示したものである。特に、日本語能力の低さのほか、レジリエンスの高さが医療専門職への援助要請行動を阻害する可能性を示唆した点は学術的に意義深い。本知見より、留学生の適切な医療アクセスの促進に向けた施策を推進する上での根拠となり得る有意義な論文であると判断された。	
[審査概要] 審査は 2026 年 1 月 28 日に主査、副査 2 名、指導教授および 4 名の陪席のもと行われた。PC により約 20 分間で研究内容および今後の展望についてのプレゼンテーションが行われた後、質疑応答が行われた。審査では、調査対象とする留学生の居住期間の妥当性、メンタルヘルス尺度の選択理由、医療アクセス障害の定義の妥当性、レジリエンスの高さが医療アクセス障害のリスク因子となる理由など多岐にわたる質問があり、申請者は概ね適切な回答をしていた。	
最終試験結果の要旨	
[研究能力・専門的学識・外国語（英語）試験等の評価] 上記の研究発表および質疑応答から、申請者は当該研究領域に関して十分な専門的知識、研究能力および研究発表能力を有していると判断した。英語読解力は英文論文の一部を指定し、その場での和訳により十分な読解力があると判断した。また、審査では常に真摯な態度で、礼儀正しく、学位授与に値する人物であると評価した。	